

『ユニバーサルデザイン』に関する卒業生アンケートの分析

Analysis of Questionnaire on “Universal Design” for Graduates

迫 秀樹

デザイン学部 デザイン学科

Hideki SAKO

Department of Design, Faculty of Design

永山 広樹

デザイン学部 デザイン学科

Hiroki NAGAYAMA

Department of Design, Faculty of Design

デザイン学部の卒業生に授業の『ユニバーサルデザイン』に関するアンケートを実施した。アンケートで質問した項目は、授業で記憶に残っている内容、UDの理解度、仕事との関わり、学んで良かったこと、授業に対する意見・感想、今後のUD概念などである。結果として、授業の手法や内容に関する意見が多く寄せられ、また学科別にその傾向が異なった。本調査の結果、特に自由記述で述べられた意見は、これからのUD授業を検討するにあたり参考となるものと思われる。

A questionnaire survey for graduates of the Faculty of Design was conducted regarding a class titled as “Universal Design (UD)”. The questionnaire contained question items such as contents in the class that had been remaining in graduates' memories, their degree of understandings toward UD, the class's association to their jobs, good things that they had learned, their feedbacks and comments against the class and the concept of UD in the future. As a result, many feedbacks have been collected concerning the ways of conducting the class and its contents, and their trends vary by department. These feedbacks in the form of free description are thought to be served as useful references in considering the class of UD in the future.

1. はじめに

静岡文化芸術大学デザイン学部は開学時から教育目標の一つとしてユニバーサルデザイン(以下UD)の理念を持った人材の養成を掲げている。そのため、学部共通科目の区分にUDを必修科目として設置し、担当教員も種々の専門を持つ4~6人とするなど、授業によるUD教育には力を入れてきた。とはいえ、UD単独の授業を100人規模で実施するような例は学外になく、手法や内容は確立されていない。そのため開学当初から授業の手法や内容について摸索を続ける必要性があった。

そういった本学のUD授業の変遷について、我々は特別研究『UD講義・演習記録資料化研究』の中で整理し、編さんすることを試みている。その過程において、担当教員側からみた授業の分析・検討は実施してきたものの、履修者側からの意見、特に履修後に数年経過して社会で気づくような授業への意見も必要ではないかとの考えが生じてきた。例えば、授業の終了時に実施するアンケートは、理解度などの数値に重点が置かれており、自由な意見は多く得られない。また、UD授業では授業前後に独自のアンケートを実施したこともあり、その内容に関してはまとめて報告をしているが(迫, 2010)、それは授業前後という時期であり、卒業後の経験や業務との関わりにおいてUD授業が活かされているのか、視点や理解度が変化したのかなどについての疑問が残る。

そこで本報告は、授業を履修して数年が経過した卒業生がUDについてどのような考えを持っているのか、授業についてどのような意見・感想を抱いているのかについて調べることを目的としてアンケートを実施した。

2. UD授業の概要

卒業生に実施したアンケートについて述べる前に、分析時に前提として必要となる授業の概要と変遷について述べる。まずUDの授業は2年前期の必修科目で約120人が履修する。講義と演習を組み合わせると3単位となっており、年度によって割合・内容が異なるが概ね講義部分ではUDの理念やUDの分野別展開(応用事例)であり、演習部分では疑似体験、製品分析、UDの提案などを行う。その割合の変遷について図1に示す。

初年度の担当教員は主担当が空間造形所属、それに生産造形所属の教員が2名と補助教員が1名(生産造形所属)、実習指導員が2名であった。5期生まではそれに空間造形所属の教員が1名加わり、4名から5名の教員が担当していた。6期生からは主担当が生産造形所属の教員に代わり、7期生からはメディア造形所属の教員も加わって最大で6名が担当することもあった。7期生以降は3学科の教員が必ず1名は入るようになった。

授業の内容については担当教員間で毎年検討し、変更してきた。その際、問題点として挙げたのは第一に到達点の設定である。UD授業で期待される到達点を大別すると、UDの理念を理解すること、UDの理念に基づいた提案が出来ることの両者となる。しかしながら、この二つを両立させることは大変困難である。理由として、2コマ15週という時間的制約があること、2年前期という時期的な問題の2点がある。後者は特に建築系の課題を与えた場合、2年前期では時期的に早すぎて専門的な提案に至らない可能性が高い。図1に示した授業内容の割合が年度毎に変動しているのは、理念の理解に重きを置かず、提案の良さに

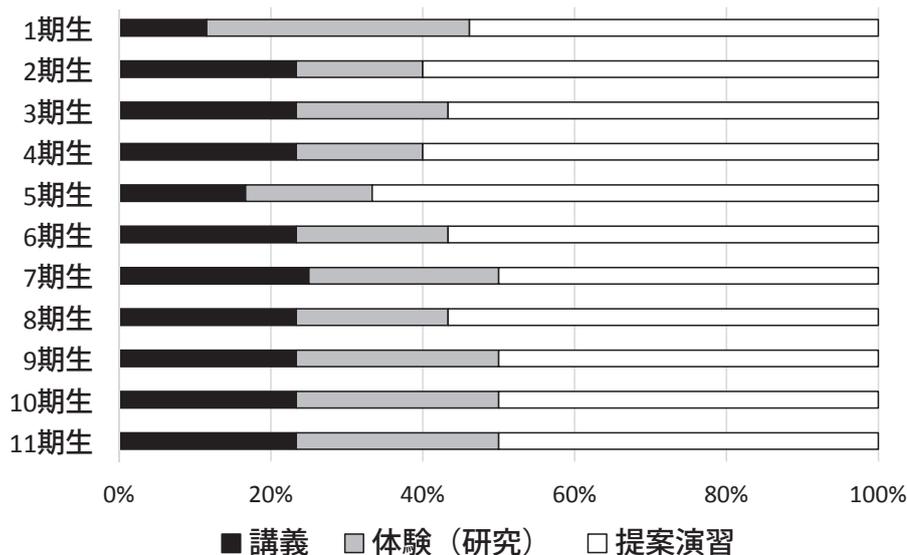


図1. UD授業の割合における変遷

重きを置くかで試行錯誤をした結果である。

授業の問題点の第二は、与える課題のテーマや扱う内容をどうするかという点である。UDは3学科合同の必修授業となっているため、学生による興味・提案の方向性が大きく異なる。7期生以降で3学科の教員が必ず1名入ようになったのは、授業に対する意欲の差異を可能な限り少なくするという意図もあった。

この2つの問題点があることは認識した上で、5期生までは最終課題のテーマを7～10種からの選択性にしてきたところを、6期生以降はポットと炊飯器から（後にFAX、地図などを追加）と絞ることにした。第一の問題点として挙げた理念の理解を目指すか提案の良さを旨とするかの中で前者に重点を置いたものである。疑似体験と製品の分析手法を合わせてUDの理解に努めるように促した。つまり5期生以前と6期生以降で授業の狙いに変化したと言える。そのため、後の分析ではこの前後で分けて検討することにした。

なお、本報告で述べているUD授業とは開学時から2012年度までのものである。その後の授業は今回のアンケート対象となっていないこともあるので、本報告では触れない。また、2015年度にカリキュラム改編があったため、本報告とは同じような形式・履修者数ではなくなる見込みであることも添えておく。

3. 調査方法

3-1. 配布の時期・対象

調査の対象は本学デザイン学部を卒業した1期生から11期生（2014年3月卒業）である。自記式の調査用紙に依頼状を添えて2015年2月下旬に郵送した。1196通を送付したが、返送されたのは167通であった（回収率は約14%）。

3-2. 質問項目

調査用紙で次の10項目について質問した。（ ）内は回

答の方法である。

- ①入学年、学科
- ②授業で記憶に残っている内容（選択肢から複数選択可）
- ③受講から卒業にかけてのUD理解度（5段階の尺度）
- ④現在のUD理解度（5段階の尺度）
- ⑤（③と④で理解度が異なる人に）その理由（自由記述）
- ⑥仕事とUDとの関わり（ある、なしの二択およびある人は自由記述）
- ⑦UDを学んで良かったこと（自由記述）
- ⑧授業に対する意見・感想（自由記述）
- ⑨今後、UDの概念はどうか（自由記述）
- ⑩大学への意見・感想（自由記述）

質問項目②における選択肢は次の通りである。UDに関する講義、高齢者疑似体験、障害（視覚障害など）の体験、製品（ポットや炊飯器等）の分析、発表会、グループ活動、ゲスト講師による講義、その他。

質問項目③および④は1（全く理解できなかった）から5（とても良く理解できた）の5段階から1つの数値を選択させた。

3-3. 分析方法

質問項目②～⑨について学科別および入学年別で回答を検討した。入学年別とは、先述したように主担当教員の交代とともに授業内容が6期生（2005年入学生）から大きく変化しているため、1～5期生と6～11期の二つに分けて分析した。

質問項目③および④は、平均値と標準偏差を求め、さらにそれぞれの回答毎に④から③を引いた数値を理解度の差として求めた。

自由記述である⑦～⑨の回答は、その内容をカテゴライズした上で同じカテゴリーとなる回答数およびその割合を求めた。

質問項目⑩は本報告の結果からは除外した。

4. 結果および考察

4-1. 回答者の属性（質問①）

得られた回答を期別、学科別にした数をそれぞれ表1と表2に示す。初期の卒業生は、卒業してから十年以上が経過しており、近年の卒業生と比較して回収数が少なくなると予想されたが、どの期においても10人台の回答が得られた。また、学科別に見ると生産造形学科卒が多く、技術・メディア造形学科卒が少なかった。空間造形と生産造形は卒業生の実数の違いがそのまま表れていると捉えられるが、技術・メディア造形はそれよりも少なく、生産造形の半数以下にとどまった。

表1. 期別の回答者数

人数		
1期	16	71
2期	10	
3期	15	
4期	19	
5期	11	
6期	17	96
7期	12	
8期	18	
9期	17	
10期	15	
11期	17	

表2. 学科別の回答者数

	人数
生産	83
技術・メディア	33
空間	50

4-2. 記憶に残っている内容（質問②）

選択項目それぞれの回答実数および回答者数から見た割合(%)を表3に示す。表中の「生」は生産造形学科卒、「技・メ」は技術造形学科およびメディア造形学科卒、「空」は空間造形学科卒である。

表3. 記憶に残っている内容

	計	学科別			期別	
		生	技・メ	空	1-5期	6-11期
高齢者疑似体験	115 (68.9)	59 (71.1)	21 (63.6)	35 (70.0)	47 (66.2)	68 (70.8)
障害の体験	90 (53.9)	47 (56.6)	17 (51.5)	26 (52.0)	37 (52.1)	53 (55.2)
製品の分析	84 (50.3)	51 (61.4)	14 (42.4)	19 (38.0)	7 (9.9)	77 (80.2)
UDの講義	78 (46.7)	39 (47.0)	15 (45.5)	24 (48.0)	39 (54.9)	39 (40.6)
発表会	32 (19.2)	16 (19.3)	3 (9.09)	13 (26.0)	11 (15.5)	21 (21.9)
グループ活動	28 (16.8)	16 (19.3)	3 (9.09)	9 (18.0)	5 (7.0)	23 (24.0)
ゲスト講師	15 (9.0)	12 (14.5)	3 (9.09)	0 (0.0)	2 (2.8)	13 (13.5)
その他	17 (10.2)	10 (12.0)	1 (3.0)	6 (12.0)	10 (14.1)	7 (7.3)

() 内は回答者数からみた割合

まず全体的に見て多かったのは高齢者疑似体験であり、その次が障害の体験である。やはり身体を動かしながら日常と異なる視点を持つことができる疑似体験は記憶に残りやすい。また、講義も半数近くが記憶に残っているようである。当然ながら記憶に残っているのは講義の一部ではあるだろうが、1期から5期の卒業生においても5割を超えていることから、UD教育において講義（いわゆる座学）もまた一定の効果を持つことが分かる。

学科別、期別で大きな違いがあるのは製品の分析である。期別で見ると1～5期と6～11期とでは9.9%と80.2%と大きな開きがある。これは前述のように、6期から製品分析に比重を置いたことから予想通りの結果である。また、学科別では生産造形と空間造形で61.4%と38.0%という開きが生じていた。製品分析をその後の課題や業務で活かす可能性が高い生産造形と、あまり活かす機会が無いと思われる空間造形の違いと言えよう。

なお、記憶に残っているからその内容が良い、残っていない内容は悪いという短絡的な見方はできない。記憶に残るという脳内メカニズムから考えれば、積極的な意思や選択性を持って記憶を残すわけではなく、後々に振り返ることが多かった、思い出すことがあったということ、ないしは嫌な体験として残っているということも考えられるためである。ここでは、記憶に残っているということ、その後の機会に繋がった可能性があるという程度の理解にとどめておく必要がある。

4-3. UDの理解度（質問③～⑤）

UDの理解度については、1から5の数値で回答しており値が大きくなれば理解度が高い。その平均値および標準偏差(SD)を求めた結果、受講した当時が3.48 (SD=0.78)、現在が3.37 (SD=0.83)だった。当時と現在の理解度について対応のあるt検定を行ったところ、有意な差が認められた(t=1.98)。つまり、受講した当時よりも現在の方が理解度としては低い傾向にあると言える。

次に、個々における理解度の差を求めた。現在の値から当時の値を引き、その値が正であれば「向上」、0であれば「不変」、負であれば「低下」としてカテゴライズした。その結果を表4に示す。全体的には6割程度が不変であり、低下した人の方が向上した人より若干多い。学科別にみると、技術・メディア造形の卒業生は、低下より向上の割合が多い。また、期別で見ると1～5期は6～11期に比べて不変が少なく、向上および低下の割合が多い。

自由記述によれば、理解度が向上した理由として仕事などでUDに触れる機会があったためが多かった。低下した理由として多かったのは、卒業後にUDと接していないため、最近のUDに関する情報が入ってこないためなどであった。

4-4. 仕事とUDとの関わり (質問⑥)

仕事でUDに関わることがあるかどうかについての回答実数および回答者数から見た割合 (%) を表5に示す。全体的に見ると40%を超える卒業生が、仕事の中で何らかの形でUDに関わったことがあると回答した。学科別に見ると、空間造形学科が関わりあるとした回答者の割合が最も多く、技術・メディア造形学科がもっとも少なかった。期別では大きな差はなかった。

「関わりがある」とした回答の具体例は、生産造形学科がスポーツ用品、家具、玩具などの商品開発において、すなわちプロダクトデザインにおけるUDとして関わるといった回答が多かった。また、サイン、印刷物、Webサイト等のデザインにおける関わり、接客時における関わりなどが見られた。技術・メディア造形学科では、生産造形にも見られたWebサイト、印刷物との関わりがもっとも多く、空間造形学科では建築設計やインテリアコーディネータ、公共的なまちづくりなどといった建築・空間設計におけるUDが多く、また接客時の関わりも見られた。特に空間造形学科は、企業や公的機関において高齢者向けの建築物に関わることが多く、そのことが他学科よりも高い関わり方に繋がっているようである。

4-5. UDを学んで良かったと思うこと (質問⑦)

質問⑦の回答は、その内容に関して「概念の理解」、「視点の変化」、「知識の獲得」、「手法・体験」、「その他」のカテゴリーに分類した。その結果を表6に示す。「概念の理解」とはUDの概念や考え方などについて、それを理解することが出来て良かったとするカテゴリーである。「視点の変化」は授業を経て新たな視点・観点が得られたとする意見や、気づきがあったと回答したカテゴリーである。「知識の獲得」は授業を通じてUDに関連する知識を得られて良かったとするカテゴリーである。「手法・体験」は授業で実施したデザイン分析などの手法、高齢者・障害者の疑似体験などを良かったと答えたカテゴリーであり、「その他」はその4つのカテゴリーに属さない回答とした。

全体的に見ると「概念の理解」「視点の変化」「知識の獲得」「手法・体験」の順が多かった。「概念の理解」では仕事で役立っているから良かった、生活や普段のモノ・空間との接する機会において役立っているから良かったとする意見が多かった。例えば、「デザインの仕事をやる中で、クライアントからUDについて聞かれることがあるが、UDの概念的なことは話すことができ、良かったと思う(生産1期)」、「仕事でUDの話が出たときやUDの考え方をもって設計が出来たとき(空間3期)」、「祖父母の家を改築するときにバリアフリー、UDの考え方が役に立ちました(生産11期)」などである。「視点の変化」でも各種の体験や多様な人々に関する講義を経て、新たな視点を得た、多様性に気付いた、立場の違いに気付いたことなどから、様々な場面で役立っているから良かったという意見が得られた。例えば、「UDを学んだおかげで、高齢者の立

表4. UD理解度の変化

	計	学科別			期別	
		生	技・メ	空	1-5期	6-11期
向上	24 (14.4)	9 (10.8)	7 (21.2)	8 (16.0)	13 (18.3)	11 (11.5)
不変	104 (62.3)	52 (62.7)	21 (63.6)	31 (62.0)	38 (53.5)	66 (68.8)
低下	39 (23.4)	22 (26.5)	5 (15.2)	12 (24.0)	20 (28.2)	19 (19.8)

() 内は回答者数からみた割合

表5. 仕事UDとの関わり

	計	学科別			期別	
		生	技・メ	空	1-5期	6-11期
関わりある	70 (42.4)	32 (39.0)	9 (27.3)	29 (58.0)	31 (44.3)	39 (41.1)
関わりない	95 (57.6)	50 (61.0)	24 (72.7)	21 (42.0)	39 (55.7)	56 (58.9)

() 内は回答者数からみた割合

表6. UDを学んで良かったこと (カテゴリー別)

	計	学科別			期別	
		生	技・メ	空	1-5期	6-11期
概念の理解	47 (28.1)	20 (24.1)	9 (27.3)	18 (36.0)	23 (32.4)	24 (25.0)
視点の変化	36 (21.6)	17 (20.5)	9 (27.3)	10 (20.0)	13 (18.3)	23 (24.0)
知識の獲得	25 (15.0)	13 (15.7)	4 (12.1)	8 (16.0)	11 (15.5)	14 (14.6)
手法・体験	18 (10.8)	13 (15.7)	4 (12.1)	1 (2.0)	7 (9.9)	11 (11.5)
その他	6 (3.6)	5 (6.0)	1 (3.0)	0 (0.0)	3 (4.2)	3 (3.1)
無回答	35 (21.0)	15 (18.1)	6 (18.2)	13 (26.0)	14 (19.7)	21 (21.9)

() 内は回答者数からみた割合

場に立つことが出来ました(空間7期)、「人と関わる際にもしかしたら～気味の人かもと考えられるようになった(生産11期)」、「様々な価値観に触れ、理解したいと考えられるようになった(メディア11期)」といった意見である。「知識の獲得」では全般的な知識を得られたことが良かったとする意見、色覚や視覚に関する知識が得られたことが良かったとする意見が多かった。特に色覚は6～11期の卒業生で顕著だった。これは、7期からメディア所属の教員が加わって色彩の講義をしたり、その後、特別講師として色弱の専門家を招聘したりしたことが影響しているものと思われる。

学科別に見ると、空間造形学科で「概念の理解」への意見が多い。これは、前項で示したように空間造形学科の卒業生は仕事でUDと関わりを持つことが多く、それゆえにUDの理念や考え方の理解が現在でも活かされている人が多いことによるものと推察される。

4-6. 授業UDへの意見・感想(質問⑧)

質問⑧の回答は、その対象について「全体的」、「視点」、「テーマ・内容」、「焦点・割合」、「手法」、「人数」、「その他」のカテゴリーに分類した。その結果を表7に示す。「全体的」とは授業全体に関する意見・感想のカテゴリーである。「視点」はUD授業で伝えるべき視点、考え方などに関するカテゴリー、「テーマ・内容」は授業で扱うテーマや内容など、「焦点・割合」は授業内でどこに焦点を当てるべきかという意見や内容のバランスなどに関するカテゴリー、「手法」は体験や分析などの授業内で用いた手法に関するカテゴリー、「人数」は授業で履修した人数や授業中のグループ作成などに関するカテゴリー、「その他」はそれらのカテゴリーに属さない意見・感想である。

回答の割合を全体的に見ると、「手法」「テーマ・内容」「視点」「その他」の順に多かった。「手法」はその多くが疑似体験に関するものであり、特に講義と体験が繋がったかたちで高齢化や障害についての知識が記憶に残っているという意見が多数を占めた。例えば「体験や具体例を多く提示しての授業はとても面白く、今でも印象に残っています。今の仕事に就いているのも、この授業の影響が大きいです(生産1期)」、「デザインをしていく上で、高齢者や障害者の体験は必要なことだと実感しました(空間2期)」などである。ただし、「疑似体験は印象に残っていますが、高齢者、障害者に偏っているように当時としては思いました(生産1期)」という意見や「疑似体験は貴重

な体験であったが、事前に目的や問題発見のコツなどをインプットしてから行った方が良かったのではと思います。自分を含め、目的がはっきりしないまま行っていたように感じます(生産6期)」のように、さらなる体験手法の改良を求める意見もあった。疑似体験は記憶に留ませようとすれば効果的とはいえ、単に体験させるのではなく過程や方向性などについて熟慮すべきであるといえる。「テーマ・内容」にはWebデザインを手がけたかった、サインをもっと学びたかった、ポット・炊飯器以外のテーマに取り組みたかったなどの希望が多く書かれた。前述したように6期生以降は理念の理解に重点をおいたことから、これらの意見は予見されたことではある。しかしながら、テーマの自由度・選択性についてはさらなる検討・工夫の余地があるとも言えよう。「視点」はUDには無理があるのではないかといった否定的な意見、UDの視点を持たたことは良かったという肯定的意見の両者があった。例えば「大学の講義中にも質問したことがあるのですが、ユニバーサルデザインは無理があると思う。バリアフリーデザインが限度だと思う(生産1期)」というように、UDの完全な実現は難しいとの見解がある。授業では理念としてのUD、現実のデザイン提案としてのUDという切り分けが困難であり、UDの理解において混乱をきたす履修者もいたと思われる。UDは担当教員が複数になるため、可能な限り齟齬が生じないように、理念と現実のデザインについての伝え方にも意識を配る必要がある。

4-7. 今後のUD概念(質問⑨)

質問⑨の回答については、その方向性についてカテゴライズした。具体的には、そのままの方向性で「浸透・定着」というカテゴリー、方向性としては似ているがさらに進化する、概念が広がるといった「進化・拡大」のカテゴリー、それらとは逆に否定的な捉え方や狭まる方向性となる「後退・限定」のカテゴリー、それら以外の「その他」である。その結果を表8に示す。

結果として学科別、期別のどの属性でみても、「浸透・定着」が約半数を占めた。このカテゴリーは、UDの概念としては変わらないものの、次第に浸透して当たり前のものとなる、一般的・普遍的な考え方となる、そしてその結果としてUDという言葉はなくなるといったような捉え方である。これは授業においてそのような将来像を理想として伝えていることから、多くの回答に繋がったと考えられる。「進化・拡大」のカテゴリーでは、授業で多く取り上

表7. UD授業への意見・感想(カテゴリー別)

	計	学科別			期別	
		生	技・メ	空	1-5期	6-11期
全体的	10 (6.0)	7 (8.4)	1 (3.0)	2 (4.0)	3 (4.2)	7 (7.3)
視点	20 (12.0)	11 (13.3)	2 (6.1)	7 (14.0)	13 (18.3)	7 (7.3)
テーマ・内容	27 (16.2)	10 (12.0)	8 (24.2)	10 (20.0)	12 (16.9)	15 (15.6)
焦点・割合	11 (6.6)	6 (7.2)	2 (6.1)	3 (6.0)	2 (2.8)	9 (9.4)
手法	28 (16.8)	15 (18.1)	4 (12.1)	9 (18.0)	13 (18.3)	15 (15.6)
人数	8 (4.8)	4 (4.8)	1 (3.0)	3 (6.0)	0 (0.0)	8 (8.3)
その他	19 (11.4)	8 (9.6)	5 (15.2)	6 (12.0)	8 (11.3)	11 (11.5)
無回答	44 (26.3)	22 (26.5)	10 (30.3)	10 (20.0)	20 (28.2)	24 (25.0)

() 内は回答者数からみた割合

表8. 今後のUD概念（カテゴリー別）

	計	学科別			期別	
		生	技・メ	空	1-5期	6-11期
浸透・定着	89 (53.6)	49 (59.0)	15 (45.5)	26 (52.0)	35 (49.3)	54 (56.8)
進化・拡大	27 (16.3)	13 (15.7)	7 (21.2)	7 (14.0)	11 (15.5)	16 (16.8)
後退・限定	11 (6.6)	4 (4.8)	3 (9.1)	4 (8.0)	4 (5.6)	7 (7.4)
その他	25 (15.1)	9 (10.8)	5 (15.2)	11 (22.0)	15 (21.1)	10 (10.5)
無回答	14 (8.4)	8 (9.6)	3 (9.1)	2 (4.0)	6 (8.5)	8 (8.4)

() 内は回答者数からみた割合

げてきた建築、街づくり、プロダクトなどのジャンルから文化、サービスといった「コト」にUDの方向性が広がるという考えが多かった。また、ユーザーをより細分化することで全体の満足度が高まるという考え方や、美しさなどの要素も加わってUD概念が広がるという考えが生産造形卒業生に多かった。ユーザーの細分化については特に生産造形学科専門科目の「フィッティングデザイン」で伝えている内容であり、UDとの関連についても講義していることから、その理解に基づくものと考えられる。「後退・限定」のカテゴリーはUDに関して否定的・悲観的見方から来るものであり、必ずしも必要な概念ではない、狭い範囲でしか適用できないというような意見などである。そう多くはないとはいえ、若干数はそう捉えていた。また、学科別に見て技術・メディア造形で「進化・拡大」と回答する割合が他の2学科より多かった。このカテゴリーは先述のように文化、サービス、コトへUDが広がるという考え方である。プロダクトや建築の面から紹介されるUDに物足りなさを抱くことが、技術・メディア造形には多かったと予想される。

5. まとめ

卒業生に対するアンケートをまとめた結果、おおよその傾向が捉えられた。それは学科別、期別において異なっており、特に学科の差異に関してはUD理解度の変化、授業への意見・感想、今後のUD概念などにおいて顕著なものがあった。生産造形学科はUD授業の単独によるものというより、他の授業で得られた知識や体験も含めて回答が成り立っている傾向があるようであり、また、製品分析を実施した6期生以降に肯定的意見が多かった。技術・メディア造形学科はこれまでの授業でニーズを汲み取れていなかった傾向がある。アンケート回答自体の数が少ないこ

とも、UDに対する興味が低いままであることを裏付けている。空間造形学科は卒業後のUDとの関わりが最も強く、実感や応用した経験としての意見が多かった。ただし、本学デザイン学部は2015年度より1学科5領域に改編されており、これまでの3学科で求められてきたUD授業の方向性とは異なってくる可能性があるため、留意が必要となる。

手法や内容で見ると、高齢者疑似体験や障害の体験などが強く記憶に残り、学んで良かったとする見方が多かった。単に体験をさせて記憶に残ると言うことが良いとは一概に言えないことから、今後の授業で実施するとしてもその効果や理解を促したい内容についてより詳細な検討をすべきである。

いずれにしても、自由記述が多かった今回の回答についてはさらなる分析を重ね、担当教員間での情報共有を図っていく必要があるものと思われる。

引用・参考文献

- (1) 迫秀樹:『ユニバーサルデザイン』における授業前後の学生アンケートの分析、静岡文化芸術大学研究紀要, 11, 145-151, 2010.
- (2) 静岡文化芸術大学10年史編集委員会編: 静岡文化芸術大学10年史, 平凡社, 2014.
- (3) 河原林桂一郎, 古瀬敏, 坂本鐵司, 迫秀樹, 的場ひろし, 三好泉: UD教育・活動 これまでの10年、これからの10年, UD先進事例ー多様性への挑戦、IAUD会員の取り組みー, 206-215, 2010.

謝辞

卒業後のアンケートにも関わらず、真摯に答えてくださった卒業生167名の方々に深く感謝いたします。